

雲  
妙  
間  
雨  
夜  
月  
七

旅  
195  
7

13  
195  
7





大藏省 道

大日本政府出納局

和漢書 藁

雲妙間雨夜月卷之五

東都

曲亭馬琴編次

第十一套 桑の真弓蓬矢

大川

東

於 195 7

延文二年五月四日の朝近江國愛智川武佐の向雷雨甚しく琵琶湖の水を巻のげりとおぼしく。鮎鱒さんど。活るがう雨は難うく降上。一節供るれど。民間ハ戸を垂ら老く。瞬ハ昨夜のすくふ釣もあるが。あつ松葉折焼く。時うぐね蚊。火を燦ら。或ハ公何それ声く。昔門屋を讀もゆ。そ小幡の高費友定物右馬のゆるる年國司の威徳。うりて失ひつる黄牛をさう復。忽地は憤を消。今年ハ。牛の數あけく養殖しく。塩を草津へ積送り。活業のよさをい。宜。まふふの日け雷雨。牛小屋の屋棟を吹剥ら。是牛ハ。直。

雲色月



ゆつゝあぞ。物右あつて慌忙つ。牛牽の男どを。屋の上よの舟。塩

膏うけり。雨漏を禦まめんと。主従ひと置くと罵りの人お

一發し。車輪のどを天火頂の上ふ落かす。直に屋棟を衝

て。致さる牛の間へ墜と落る音。天地を響音して。おそろし

これに殺なく。彼黄牛へさうらう。近曾殿の金をめく。購

七頭驚えり。さうらうを男どもへ忽地に氣をうり。多し屋棟

を駈らして。中へ猛に牛牽ありて。これをうりともせむ物

ありて棟搦より著つ。雲を衆らんとつを鞭り。矢庭は

さうらうをけり。彼煙は累々。のめおそろし。さうらう

あつてのう。かて雲散り。雷鳴もあさうらう。物右あつて

小幸しく迎ふ。火傷をさるの氣をさるひつ。下男下女

小医師のさうらう。目今雲は累々。暴雨とも零る。小

初療の中ありて。さうらうと交るを。さうらうて。さうらう

さうらうをさうらう。彼射をり。あるを医師受りて。昏倒

上は裁る。射はる。さうらうと交り。且く死する人。云と

師をさうらう。さうらうと。揚記が簡便方。見えたる。参

門。五味子の四味を調合して。それと飲せ。といふ。下女

果二三貼つ。けり。腹用さうらう。その入ら。清く。さうらう

は火傷あつて。降真番を焼く。その煙も。燻と。溜汁

立地は乾き愈えり。か辛く。恙をさうらう。物右あつて

ハ雷声より驚き。聾し。さうらう。これの。治む。さうらう

一味を煎。用ひ。汗。お常の。さうらう。さうらう

一味を煎。用ひ。汗。お常の。さうらう。さうらう









幸林 幸林 幸林 幸林 幸林

幸林 幸林 幸林 幸林 幸林







子生とくこれを射す。四方の志あるを示と。その父母これを教  
これを予しを第一茂とてとり。夫桑ハ神木なり。方書その功を稱す  
る最精細。又一種山桑あり。桑ハ似る。材弓弩中るとりへの  
是なり。又蓬ハ禦乱の草くとり。本草木下集解  
正字通等の説。ををり。これの  
弓夫を節物とて。今日毎家ニ。菖蒲を骨。蓬を挿めたるを  
菖蒲ハ蛇毒を解す功あり。この三種の草木。百邪を征す。まよ  
家ハ素と蓬の弓矢をり。某玉は代るの之と。説示は太吉ふり  
嘆く。膝のさむむをる。海その細くを同人とる。小幡乃  
物右兼。殊す。こころをら。怪しがる法師を。縛る  
を。五人の奴隷は担。村長ともみ。これを縁類の下。川とえ。皆  
つゆ。さうとや。さてもこの朝驟雨。雷公の鳴る。物右兼が  
牛小屋の。小落り。物右兼が妻ハ。聾とる。その餘。或ハ昏倒  
傷せり。のあり。と。幸ニ命恙。さる。小これる。奴隷を。猛  
く。矢庭に落る。雷公を。敲伏せ。遂ニ縛る。ゆひ。が。六実の雷  
公あり。往ニ西修法師と名。物右兼が家の黄牛を。杜騙  
たる。悪僧あり。怪し死。その落ると。膳を。打。酔  
る。どく。向。の。應。さ。さ。引。祈  
と。の。果。さ。小。太。吉。さ。又。母。の。仇。と。禱。の。そ。結。め  
飛。め。か。る。さ。形。勢。を。詮。運。尻。目。は。か。け。を。止。め。ち。う  
立。出。つ。雷。神。を。さ。ん。か。う。ん。物。右。兼。の。ホ。は。り。さ。う。さ。の。の。毒。塵  
と。小。墜。さ。る。理。外。の。奇。談。を。う。ま。り。別。又。故。あ。る。べ。い。さ。れ  
か。の。あ。と。往。ニ。黄。牛。を。奪。ひ。去。る。悪。僧。あり。是。非。を。論

六色門集

二二

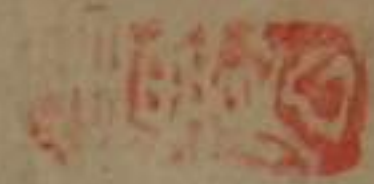


お及びど。さう小放一ぐら癖者るり。さうな奥一さういひ論し。  
 俄頃雑兵五七人を咄びくゆやう。光僧昏絶さういひも。敬馬ハ醒  
 らん。背をうつし打つええさういひ。雑兵ホらるるをゆるく一人奥のそ  
 握り固め。やと声のけく。礮と打バ。雷神因う。眼を睜見驚た  
 且呆れ。さういひ惑へる気色あり。がふむのりて。そのいれを  
 ろどろわくハ縛らるるぞういひ。そのとた詮通膝立る母。刀を突立  
 つ。雷神を信とみりさういひやう。汝小幡する。物を取つが牛小  
 屋は墜さく。縛らるるをさういひ。以のれくる。汝いぬる年物を  
 虎つを欺さういひ。黄牛を奪去り。瀬田の二郎次郎といひの又賣  
 よう。彼を連累せり。憐れ二郎次郎ハ妻を喪ひ。子も別と  
 刺底人見あり。汝は撞見。直は怒りさういひ。恨く。嫂を切害し。  
 さういひ。罪の脱れさういひをさういひ。領主は訴く。死を賜ひ。子さういひ  
 らる少年ハ。彼二郎次郎が兒子あり。太以吉と名を呼る。その母又母の  
 仇を復さんとさういひ。日夜寢食を安うせど。その孝を天は通し。神  
 明を憐れ。居まが。その仇人ハあり。是併汝が牛を盗むの悪報  
 悔さういひ。物を取つ。生拘らる。天綱ハ遂に漏る。さういひ。首状  
 じよといひ。太以吉ハ怒気面より。刀の鞘を握り。詰て。雷神と  
 ぶむ。あうさういひ。汝ハ共ハ天を戴ぐるの誓あり。直は怒りも果ど。げん  
 今をを下さる。國司の仰をすて。さういひ。我が我の元僧。雨田の西  
 陣号。雷神と名を呼る。のくと。名告く。天珠は伏う。とぞ罵る。雷神  
 冷笑ひ。小ざういひ。童が仇人。呼る。さういひ。どぞ。さういひ。名告  
 せん。いね。秋神崎の狂女。蓮葉は。練る。とぞ。寺は。









伊予守

TBEOWAN

伊予守

晋子  
塵

伊予守











山田詮通が家より。これを親の仇と罵る。這奴亦悉極殺  
 てんと。おひつる。彼武喜早か。見子太は吉と申らん。が。津桑の寺を  
 り。立ち立ひ。い。これと歌。その矢前を脱。は。我  
 て。も。む。も。汝亦よあへり。亦詮這奴亦を世よあ。せ。後安う。は  
 すが。樹をり。城中の水壇を。樹。國司氏頼を。め。城中  
 の。奴。と。餓。湯。は。苦。め。け。への。恨。を。消。さ。す。汝亦よ。中。里。よ。い。さ。て  
 心の。ひ。や。小。調。伏。の。祭。器。と。買。り。よ。ま。ふ。と。その。意。を。得。さ。し。懐。か。り  
 金。三。枚。中。より。一。枚。出。し。て。投。ぎ。ま。す。白。雲。黒。雲。一。残。り。も。及。び。ど。あ。る  
 ぐ。と。應。つ。金。を。受。と。り。て。二。人。り。う。と。も。い。ま。り。去。り。次。の。日。よ。至  
 る。唯。備。全。く。整。ひ。一。つ。雷。神。の。峯。の。上。の。瀑。布。よ。注。連。川。纏  
 り。岩。の。上。に。坐。と。り。種。の。供。物。を。高。札。に。懸。る。と  
 白。雲。黒。雲。を。呼。び。い。や。う。され。今日。より。七日。か。回。影。食。し。て  
 法。を。終。し。城。中。の。水。壇。を。堰。留。る。る。れ。ば。女。人。の。こ。ろ。と。樵。夫。山。見。よ  
 至。る。と。近。づ。く。と。る。と。い。ふ。と。女。人。と。二。人。諾。し。う。壇。の  
 下。よ。番。次。せ。り。つ。て。雷。神。の。志。を。天。地。を。礼。拜。し。口。よ。咒。文。を。唱  
 へ。酸。隼。と。雲。起。り。霧。又。よ。立。升。と。忽。地。その。形。状。を。見。せ。し。り  
 其。の。時。と。宝。澤。の。音。の。も。と。う。く。幽。々。と。い。ふ。と。

第十二套 岩戸山の麓の糸

その妙太は吉の仇人雷神を打ちつて。遺恨は堪む。彼既幻術  
 を。用。ひ。飛。行。自。在。な。れ。ば。吾。等。の。敵。は。あ。ら。ぬ。只。の。う。へ。神。は  
 の。冥。助。を。仰。ぎ。丹。誠。を。凝。ら。し。て。祈。願。し。ま。る。の。外。あ。る。が。う。ら。び  
 と。く。同。胞。志。を。あ。ら。し。め。が。城。外。の。観。音。堂。に。詣。り。大。慈。大。悲





霊鷹塚

あはれ  
霊鷹塚

あはれ



たえ

たえ

あはれ  
霊鷹塚

あはれ







奇るるる。と嘆賞して。ゆづり雁鳥の塚を拜し。遂に観音寺と鏡を懐き  
て城中に立入り。詮通は縁由を告ぐれば。詮通は。かく驚嘆し  
且歎く。いづれは土中出現の菩薩なり。観音寺の本尊あり。そ  
うす。郊外の小堂に置あるべし。のまのまに。今立地は雷神が在るを  
と。そのの御仏の灵験ふらそと稱讃し。やがて國司は祈り。まんとて。その  
夜俄頃に出仕く。主君氏頼よ。その件の一五十一を告ぐ。あはれ  
大に驚愕なり。城中に水よりくくる。おぼろ。た大に驚愕。汝もや。妙太  
吉を扶く。彼悪僧を退治せよ。これ又殿の勇士に命じ。彼山乃  
林原にせよ。と。とく準備せよ。と仰られ。詮通は。くく。内なり。お  
て家へ退れ。妙太吉よ。國司の仰を告ぐ。俄頃よ。その準備を  
い。と。次の日。妙太吉は。黒髪を剪て。以て警服を垂。其の  
打掛。赤い羅衣よ。息を袈裟を被。花挿し酒を入。蓮の花を  
挿胸。の鉢を。頂に。観音の小像と。蓮葉を。鏡を。掛。雄。手。に。挿  
木を握り。雌。白。花。桶。を。引。提。朝。を。と。り。城。を。出。く。と。い。さ。り。  
岩戸山へ赴く。太。吉。ハ。詮。通。と。も。腹。巻。よ。小。白。腰。當。一。蓑。を  
笠。を。ふ。く。と。り。樵。夫。の。山。持。と。る。体。よ。お。扮。妙。が。跡。に。跟。て。あ。り。し。  
山路を登り。ゆづり。禮。方。勇。士。并。君。氏。頼。の。命。と。受。林。原。の。樹。間。に。な。り。  
り。彼。悪。僧。脱。去。る。も。あ。ら。ぬ。お。留。ん。と。せ。し。油。を。と。り。と。り。と。り。  
妙。太。吉。ハ。花。桶。を。提。鉢。を。鳴。ら。し。観。音。の。宝。号。と。唱。つ。岩。戸。山。へ。攀。登。  
ま。深。谷。地。を。帶。く。崖。岸。の。形。を。數。盡。す。高。嶺。天。に。横。り。山。崗。の  
勢。を。刀。削。煙。霞。泉。石。分。明。し。其。奇。絶。妙。只。の。峯。よ。り。登。  
たり。日。の。照。る。木。の。下。暗。く。細。く。葛。を。縁。し。松。柏。の。巖。に。登。り。



長を藤は憑いて。桃源の洞に至る。向上。青壁萬尋。眼は遠  
 けく。直下。碧潭千仞。神を傷む。羊腸。前。胸を押し。背は玉。行を侵す。離る。荆棘。足を纏。裳を紅の血。引。辛。登。ゆる。聆。然。幽。宝。音。彼。雷神。籠。崖。め。左。速。夫。炭。煙。の。翁。と。い。く。登。り。女。人。を。禁。止。と。く。禁。へ。と。い。く。妙。ハ。然。と。ら。笑。く。女。子。の。佛。の。近。曾。人。を。索。く。彼。此。の。高。峯。の。を。人。の。り。と。あ。り。け。ぬ。あ。り。と。い。く。白。雲。雲。の。功。ハ。酒。を。見。る。と。鱗。言。の。女。人。は。暮。る。青。道。を。あ。り。木。の。端。竹。の。折。深。山。の。朽。木。を。鹿。ほ。い。と。罵。る。声。と。罵。り。け。る。雷。神。を。打。げ。恨。む。女。子。を。向。上。ま。く。雲。霧。忽。ち。吹。霽。く。巖。の。上。に。坐。し。て。禪。衣。の。様。染。ま。長。く。袂。を。拈。ま。括。猪。の。袴。の。白。を。忌。ま。く。白。檀。の。高。履。を。穿。き。高。の。端。尻。を。か。け。右。に。水。晶。の。念。珠。を。丸。繰。左。に。清。濁。の。宝。釋。と。揮。鳴。し。伸。く。杖。を。栗。を。見。る。似。く。鷹。布。た。

雲霧集の功ハ酒を見るに鱗言の女人は暮る青道をあり木  
 の端竹の折深山の朽木を鹿ほい罵る声と罵りける雷神  
 を打げ恨む女子を向上まく雲霧忽ち吹霽く巖の上  
 に坐して禪衣の様染ま長く袂を拈ま括猪の袴の白を忌  
 まく白檀の高履を穿き高の端尻をかき右に水晶の念珠  
 を丸繰左に清濁の宝釋と揮鳴し伸く杖を栗を見る似く鷹  
 布た















風は吹あろころのま 好しと吐たつ。それを忘れくられも又憎やと  
 拳とあり揚とわ。その維さるうら気入ぞご初どりとまされぬる栄螺  
 の湖水よありあふらとじて進らせんと。いひ紛りて支去り。木めらまを  
 目送る。雷神又妙をええして。いづよ雲の妙とやん。いづよ夫の像  
 見ことて。ええつる鏡の。何とやえんらる憎し。今一とびえぬへらと  
 招き。いづよ恨いと鏡恥しあがるとさ。せとさ。とらんところか雷神  
 い空を廻る。阿と叫び。あふび撲地と倒り。妙の初るめり。して花桶  
 みる酒を数回雷神が。は伏せ入れ。うらと受飲。未酒の牙のそのさ  
 小酔臥て。遂に。妙の火の。巖よりさる。火雷神の画像より火出  
 る。忽地。炎と燃らせり。よらる裸し。この向ふと妙の裳を引あ  
 びく。張る。落る。籠律。律と。信とえあられ。いづと。あれ。投す。丈ある。

巖の底より。引纏る。住連を。いづら。切捨ん。朝は。やと。夕と。ええ。深山  
 風の吹あろころ。うら。あ。いづら。うら。雷の。声。り。ろ。と。も。一。團。の。燐。火。西  
 のうら。うら。飛。来。り。り。懐。よ。の。と。え。え。妙。の。猛。も。身。も。軽。く。籠。の。裏  
 田く。雲。鳥。あ。ら。む。儒。を。を。厭。む。裾。踏。み。一。嵩。よ。縁。を。と。切。と。登。り  
 結。る。若。船。と。え。え。え。見。く。准。宿。の。懐。剣。す。と。と。抜。く。住。連。の  
 真。中。下。と。切。捨。れ。天。油。越。と。結。陰。降。と。雨。の。浪。の。縁。を。乱。す。よ  
 異。う。ら。と。電。光。あ。ら。む。山。鳴。初。け。ど。動。り。ぬ。孝。心。雄。く。死。女。女。が  
 髪。あ。り。乱。し。念。ず。普。門。品。ら。れ。や。雲。雷。鼓。撃。電。降。雷。閃  
 大雨。観。音。の。美。験。あ。ら。む。え。え。と。祈。清。し。つ。逆。ら。れ。流。る。流。る。雷  
 の。あ。ら。む。一。閃。り。と。飛。り。れ。ば。燐。火。の。妙。が。懐。より。世。没。と。燃。出。る。雲。の  
 西。を。作。て。飛。去。り。ぬ。と。も。あ。ら。む。一。閃。り。と。飛。り。ぬ。雷。神。の。雨。の。下。に。







され寝られ覺て直と互漲る瀧を侍とて。その女謀られし  
 る腹は。と大は哮る。葛直はむるを。妙は。と氣もあ。觀  
 の尊像を。とさ。それら奇なる。雷神忽地。も足。編る。とら  
 飛居。撲沖と。又。又。お。誰。と。樹蔭  
 打。と。洗。額の真中打碎れ。その究。果と仰  
 雲。黒雲が首を。方の降。つ。樹蔭。小雷  
 神。い。日。觀音寺の城中。名。武者。伊原  
 次吉を。鷲小息。山田。通。二の惡僧を。誅  
 妙。供。魔。術。を。折。今。宿。志。を。遂。天。討。國。罰。の  
 り。ひ。つ。あ。怒。の。刃。受。と。罵。首。を。と。小。雷。神。の。

めと。夢。の。覺。る。か。持。し。や。お。め。り。と。あ。り。と。叫。び。牙。を。起。し。て  
 息。し。れ。知。り。空。門。は。入。り。父。母。の。菩。提。を。吊。んと。り。妻。亦。や。鹿。小  
 妾。想。我。て。俗。子。は。誘。る。罪。犯。を。催。れ。差。夫。迷。る。今。や。煩。悩  
 の。雲。晴。も。く。真。如。の。月。を。見。る。と。歡。喜。と。懺。悔。と。妙。は。流。を。こ。ひ。と  
 つ。瀧。壺。は。地。と。投。入。れ。高。野。大。師。十。喻。第。七。水。月。喻。の。句。を。听。ど。く。  
 挂。影。團。は。寥。廓。飛  
 法。身。寂。は。大。空。住  
 水。中。圓。鏡。是。偽。物  
 如。は。不。動。為。人。説  
 千。河。萬。器。各。分。暉  
 諸。趣。衆。生。互。入。歸  
 身。上。吾。我。亦。復。非  
 兼。希。如。來。大。悲。衣  
 所。了。了。合。掌。し。い。さ。え。う。り。て。父。母。の。怨。を。後。り。あ。り。南。無。阿。彌。陀。佛  
 と。念。は。れ。が。ら。う。ね。う。り。と。右。次。吉。が。閃。電。の。や。み。首。は。此。上。は。落。り。ワ。ン







かくて妙を以てす。詮通とくも小麓の下に勇士ホも會し。さつれんとい  
觀音寺の塔にまゝり。國司氏頼は復讐の方便をばえあじう。氏頼  
同胞が此度の功績を褒賞ありて。ふづり引出物殿あり。且親世の  
利益雪の山が忠魂を稱賛し。新に数間の堂宇を建立して彼觀世  
音を安置し。祈願所よまへれば。次の日件の同胞も詮通  
を以て底倉へ遣し。武章が冥境を祀らる。あつる程に妙を以て吉を國  
司の恩を拜謝して。詮通は伴を日を送り相列底倉に到着し。父の  
墓に訪る。号名寺に鞍の産物を寄進し。且木賀光補より糸糸志  
を。仇討の報告よりれば。光補あり。その純孝を感激して。次去  
よ才切草のゆを物う。その種を附屬して。養飼のゆを傳授せり。  
らよ至る。底倉の里人ホも。いと雷神が奸惡を去りて。武章とい  
惜その子ともの孝に比類あるを。嘆賞とて。詮通の嫌を次吉を  
わす。近に一雨り。ひる日室所感彼同胞がゆを。食せられ。ちよ口の  
飼のよらり。ははまれ。と。氏頼は仰て。それを浴。日のぼし。莊園に  
野をあらり。近臣より加あ。よりと。次吉の妙も。浴。付ひて。るる。は  
武士は誓縁を結んと。詮通とくも。そのゆを相給。妙の兼川  
きき。仇人雷神が幻術を破。謀もめれ。身一。び。髪を切  
は衣を着。今さら人の妻と。選俗の尼。侍。あ。べ。わ  
長く家殺よかを未。ね。父母の菩提を。吊んと。願。われ。と。つ。よ  
勸れ。も。聽。を。遂。し。祝。髪。受。戒。して。妙。雲。尼。と。法。名。と。よ。を。親。音。堂  
成就。と。り。氏。頼。が。妙。雲。尼。を。り。彼。堂。を。守。り。堂。料。を。あ。布  
り。る。夜。氏。頼。詮。通。妙。雲。尼。ち。よ。吉。ホ。友。親。世。音。告。て。定。く



しじ岩戸山は五色の鹿あり。又その山は雪山といふ。汝門ありて。観音菩薩再興  
の大願を發し。日夜普門品を流経せり。件の鹿流経の声を聞いて感佩  
隨喜し。遂に雪山が草庵のほとりを去らば。あつらふ獵夫雨田武平これ  
をとりて。普門品を流経する日雪山が菴より穴を窺ひ其処より五六  
町を隔たる谷に陰に到りて。弓矢を伏して普門品を流経する五色の鹿流経の  
声より引き去り。彼谷に陰に未とる武平忽ち射てその皮を剥ぎ推し  
おいて。その價は倍らんとし。折しも武泰武草が伊豆武俊とりのめり。  
新田氏光に従ひて京都にあり。武平が鹿皮を以て數十金とりて。武平  
購て行勝とて秘藏せり。その業因是彼より及して。獵夫武平づつ  
奇病を係りて世を去り。その子雷神法師の妻の鹿の声を以て  
墮落し。且物をとりて。然らんとて畜生を父ありと稱し。又武泰武草夫

婦に横死せり。されば彼五色の鹿は神崎の蓮華と生れて。雷神が道公を  
此武草武草は冠し。汝門雪山の邊より生れて。又雪山の山と名れ武草父子が  
信義孝行を憐れ。これより身を殺し。観音寺に奉持仏を土中に  
掘出さして堂宇建立の宿願を果せり。又小幡の物をとりて。其の比  
落よりありて。件の鹿の皮を媒に。武俊に買取て。あつらふ。溜し利を  
るもの。その悪報よりして。その子物ら。雷神の牛を盗去られ。又武草を  
其の身も終に零落と。その是脱れが。因果あり。そのまう。前  
生の悪報竭く。故に武草が巨孝。親の冤を雪すのまう。雷神も又  
冥期に培道せり。あつらふ。鏡山の雷獸。雷神法師を備へ。雨を  
降す。知徳を傳授して。其の輔とるを。件より。罪犯あり。又よ。よ  
近に。され。罰せり。あり。ある。と告め。と。覺て。後。よ。され







